

教育広報

南 会

編集・発行 福島県教育庁南会津教育事務所
 発行責任者 平山 明裕
 編集協力 市町村教委連絡協議会南会津支会
 南会津郡小中学校校長協議会



『川端ビール作戦』

南会津町教育長

星 英雄

子供の頃から、家の手伝いをいろいろとやりましたが、嫌いな仕事の一つに「刈払」がありました。植林した木の成長を助けるため、その周りの草や小木を大鎌で刈る作業です。夏休み中にやることが多く、暑い日差しの中、足場の悪い斜面で、背丈まで伸びた草木を刈る作業はとても辛く、蜂やアブに刺されることも度々でした。

大学生になってもこの作業は嫌でしたが、ある日、刈払に出かける準備をしていると「川端にビール入れておけ」と父が言いました。私の家の前には洗い物等をする川端があり、冷たい沢水が流れていたのです。

その日はとても暑い一日になりましたが、私の頭の中はもう川端のビール一色です。お陰でいつも以上に仕事も捗り、ビールを楽しむ準備もしっかりと整いました。

夕方、まんまと父の策にはまったその愚息は、仕事の疲れも忘れ父の笑みにも気づかず、冷えたビールをがぶ

飲みました。

この経験があり何か仕事をする際も、ビールのような「楽しみ」を考えたり見つけたりすることが、仕事の楽しみの一つだと考えるようになりました。おそらく父は、それを私に教えたかったのだと思います。そして、仕事の苦労も忘れ、美味しそうにビールを飲む私の姿を見たくて、「川端ビール作戦」を考えたとと思います。振り返ると父は、子供に何かをさせる時、嫌がる事には楽しみを、楽しむ事には苦労を、ちょっとずつ加えていたように思います。子供のためだけでなく、子供のする姿を見るのが、何よりの楽しみだったのでしょ。

一昨年、父の33回忌を親戚と共に営みました。仏事ですがビールサーバーが加わり「楽しみ」のある法要となりました。きっと父も喜んでくれたと思います。正に川端ビール作戦でした。



『コロナ禍後の所懐』

福島県教育庁南会津教育事務所
総務次長兼総務社会教育課長

本多 智洋

コロナ禍をきっかけとして、仕事の仕方が変わったり、「おうち時間」が増えたりして、仕事でもプライベートでも何をどうすればいいのか、今までの生活のままでいいのか等と思い悩むことが多かったのではありませんか。

さて、突然ですが、皆さんは「平塚為広」という戦国武将を御存知でしょうか。

徳川家康らと比べればほぼ無名に近い武将のため、御存知ない方がほとんどだと思います。

為広は、豊臣秀吉に仕え1万2千石を領した小大名で、関ヶ原の戦いに西軍として参戦し、大谷吉継らとともに小早川秀秋の寝返りを想定して小早川軍の陣取る松尾山の麓に布陣しました。小早川軍が西軍に向かって山を駆け下りた際、その10倍近い軍勢を一時は押し返すほどの奮戦を見せましたが、他の大名の裏切りが相次ぎ、衆寡敵せず、戦場に没したと言われていました。その辞世の句は、「名のために捨てる命は惜しからじ 終に留まらぬ浮世とおもえば（名誉のためなら命も惜しまない。限ら

れた人生なのだから）」というもので、まさに戦国武将らしい句です。

ところで、この平塚為広が、女性の権利・地位向上に尽力した「平塚らいてう」の先祖であることも、また、あまり知られていません。

雑誌「青鞥」の創刊の辞にある「元祖、女性は実に太陽であった。」で有名ならいてうですが、「生きるとは行動することである。ただ呼吸することでない。」という言葉も残しています。

為広、らいてう両名の言葉は、生きた時代や置かれた立場はそれぞれ違っても、目的のために毅然と行動することの重要さを示していると思います。

これからも、コロナ禍のように様々な制限がある中でも、自分でできることを模索し、自らの目標に向かい、愚直かつ着実に歩みを進めることが、私たち一人一人に求められているのではないかと感じています。